



# 前世で辛い思いをしたので、 神様が謝罪に来ました 8

ALPHA POLIS

## 初昔茶ノ介

*Hatsumukashi Chanosuke*



### シヴェルデ

最強の魔王。  
数々の人間の体を  
乗っ取り、悠久の時を  
生きてきた。

### シャイン

かつて勇者と契約  
していた、光の精霊。  
体は小さいが、その身に  
宿す魔力は超強大!

### 学園のお友達

#### アニエ

#### オージェ



#### フラン



#### ミシャ



### ネル

サキのお付きの猫。  
最近人間の姿に  
なることも。サキを  
お世話するのが  
好き。

### フレル

アルベルト公爵家の  
当主。有能なイケメン  
で、領民からの  
信望が厚い。

### サキ

不幸ばかりの前世を  
神様に謝罪され、  
幼女として異世界転生した。  
最近はお店作りや  
魔法の研究で  
大忙し!

### キャロル

フレルの妻。活発な  
美人で、厳しくも優しく  
サキ達を見守る。  
可愛いものに  
目がない。

### レオン

強く頼れる  
サキの先輩。  
クロード公爵家の  
次男。

### アネット

サキとフランの妹。  
背伸びしたがりで  
おしゃまな性格。

## Characters

登場人物紹介

私、雨宮咲の一度目の人生は、不幸の連続だった。

そんな私の人生は、落雷によって幕を閉じる……かと思いきや、死んだ私の前にラズダッという世界を管理する神様が現れた。

彼が言うには、私の不幸と死は、手違いによるものだったんだって。

シャルズっていう魔法の世界の管理をする神、ナーティ様はそんな私を憐れみ、次の人生こそは幸せになれますようにって転生させてくれたの。

こうして始まった、サキ・アメミヤとしての第二の生。最初はナーティ様から授かったたくさんの才能を頼りに、猫の従魔ネルとともに森で暮らしていた。

でも、ひよんなことから王都エルトで公爵の地位にあるアルベルト家当主の息子、フレル様に誘われて、公爵家の養子になっちゃった！

今ではフレル様をパパ、その奥様であるキャロル様をママと呼んでいるし、長男のフラスと次女アネットとも本当の兄妹みたいに仲良し。王都で、幸せな生活を送っているんだ。家族だけじゃなくて、友達にも恵まれた。

王都の魔法学園に通ううちに、ブルーム公爵家のアニエちゃん、お洋服が大好きなミシャちゃん、いつでも元氣いっぱいなおージェという友達もできたんだ！

この学園で勇者様の伝説を元にした劇をクラスごとに作って発表するっていうイベントがあったんだけど、その時もみんなで協力して頑張ったんだよね。

それに際して勇者様縁の地を巡るための旅行に出掛けたんだけど……楽しかったなあ。なんと旅の途中で、魔法によって一時的に生き返った、勇者リーデルさんと賢者バスカルさんが仲間に加わったんだよね！

本物の勇者様と賢者様と一緒に旅できるなんてそうそうない。大興奮だったよ！

でも、その最中に異変が起こる。パスカルさんが、禍々しい魔力を感じしたんだ。

魔力をたどった先で待ち受けたのは、国家反逆組織リベリオンの幹部ロンズデールだった。

ロンズデールは、元々リーデルさんやパスカルさんと同じパーティを組んでいた仲間でもある。

それでも覚悟を決めて戦う中で、彼はかつてリーデルさんが刺し違える形で倒した強敵・シヴェルデに乗っ取られていたのだと判明する。

リーデルさんやパスカルさんの力を借りてなんとかシヴェルデにダメージを与えることには成功したんだけど、トドメを刺す前に、逃げられちゃった。

シヴェルデはリーデルさんの体を魔法で再現して、それを乗りこなすことでより力を増そうとしているみたい。それに、リーデルさんとパスカルさんは魔力を使い果たし、安らかな眠りについてしまったから、二人を頼ることはもうできないんだ。

でも、負けない。次に私の前に現れたら、今度こそみんなと協力して倒してやるんだから！！

## 1 突然のお屋敷訪問!?

「以上が報告になります」

僕——フレルは王様にとある調査報告をした。

それを聞いた王様は眉をひそめ、口を開く。

「……情報の出所は信用できるのか？」

「はい。アルベルト家の情報網によって調べた内容と、他の機関から上がってきた報告がほぼ一致しました。間違いはないかと」

「はあ……」

王様は上を向いてため息を吐きながら、椅子の背もたれに寄りかかる。

リベリオンの内通者が国内にいるのではないか——そんなこと、王様だつて考えたくないよな。

ここ数ヶ月の間、魔物が突発的に発生する事態が、何度か起きている。

その現場を数日前にうろついていた者がいる、という通報が数件入ったのだ。

リベリオンにはチューレという、魔物を操る幹部がいる。そいつに協力していたとした

ら、立派な反逆だ。

怪しい者の素性を調べていたのだが……。

心の中で、大きなため息が漏れる。

正直、杞憂であってほしい。

これ以上、サキとフランの心労になるようなことは起きてほしくないという想いから、  
つついっいいい方に考えたくなる。

少ししてから、王様は僕の方を見て指示を出す。

「フェネス服飾店とカルバート家を監視しろ」

サキやフランと仲のいいミシヤちゃんの実家であるフェネス服飾店と、サキが慕っているメイリーの実家であるカルバート家が怪しい、か……。

僕は暗澹たる気分を胸に抱きながら頭を下げ、王様の部屋をあとにした。



「レオンさん、進学おめでとうございます」

「ああ、ありがとう。サキ」

今は学園の帰り。私はレオンさんと二人で研究所に向かっている。

レオンさんは、クロード公爵家の次男で学園最強の魔法使い。

そして、私の好きな人なんだ。

春の長期休暇を終えて私は初等科六年级になり、レオンさんは中等科から高等科へと進学した。

とはいえ、授業が終わる時間は一緒。

だから休暇が明けてからは毎日こうして二人で下校しているんだけど……この時間は密かな私の楽しみだ。

レオンさんも……同じ気持ちだと嬉しいな。

そう思いつつ、私は改めて頭の前からつま先までじっくり見る。

やっぱり高等科の制服に身を包んだレオンさん、かっこよすぎいいー！

中等科の制服は学ランみたいな感じだったけど、高等科の男子の制服はブレザーのよう  
な見た目なんだよね。

レオンさんはこの一年で背がさらに伸びた。ネクタイを締めるようになったことも相  
まって、とつても大人っぽく見える。

そんな風に考えていると、レオンさんがふと聞いてくる。

「そういえば、シャインの様子はどうだい？」

シャインは元々リーデルさんと契約していた、光の精霊。

リーデルさんから引き継ぐような形で、私はシャインの契約者になったんだけど……。「それが『まだ時が来てない』の一点張りです」「そうか……」

それから私たちは、ここ半年を振り返る。

私たちがリーデルさんやパスカルさんと旅をしてから、半年以上が経った。ロンズデールは……いや、改心したロンズデールさんは最終的に、リーデルさんやパスカルさんとともに魔力の粒子になつて消えてしまった。

でもその前に、リベリオンの情報と他者の体に乗っ取る【憑依の魔法】についての記憶を託してくれたのだ。

そしてその情報は王様やパパには報告済み。王様たちはその情報を元にいろいろと対策や戦力強化を考えてるみたい。

私たちは魔石をどのように活かすかを研究する学問——魔石工学の知識を用いて作った魔道具を売るお店『アメミヤ工房』を経営している。

そこから王家のみに魔法武器を卸していて、それらも戦力として期待されているみたいだし、頑張らなきゃなんだよね。

この世界には炎、水、風、雷、土、草、光、闇、空間、治癒、特殊という十一種類

の魔法属性がある。

魔法武器は様々な属性の魔法を発動できる魔法陣を武器に描き、魔石から魔力を供給させることで誰でも魔法が放てる、便利な代物なんだよね。

ちなみに魔法は、繰り返し使用して経験を積むことでスキル化させたり、発動過程を簡略化させたり、オリジナルの魔法を生み出したりと、応用できるんだよね。

スキル化した魔法は、強さや難しさによって第一から第十まであるナンバーズに分類され、どのランクの魔法も一度発動できればそのあとはずっと使える。

それだけでなく、魔法の飛距離を伸ばす【ア】、速度を速くする【ベ】、効果時間を延ばす【セ】、操作性を高める【デ】といったワーズや、魔法に複数の属性を付与するエンチャントなどと組み合わせさらにパワーアップできるってわけ。

ただ魔法武器にそれらを組み込むと消費魔力が大きくなりすぎてしまうため、まだ実用には至っていないんだ。

それはさておき、ロンズデールさんから託されたものは結構役に立てられている。でも、リーデルさんから引き継いだシャインとの契約、そしてパスカルさんが遺した研究成果をほとんど活かせていないのが、なんだか申し訳ない。

シャインとの契約についてはさつきレオンさんに言った通りだとして。

パスカルさんも消える直前に、これまでの研究成果を記録した魔石の在り処を教えてください

れた上に、それを好きに使っていいといってくれた。

魔石があるのは、異世界中のあらゆる魔導書が集まる魔術書塔内の、パスカルさんが復活した部屋。

そこを訪れば私の手元に現れるよう、術式を刻んでくれたって話だった。

なんなら魔術書塔の所有権も譲ってもらったのに……勉強やら魔法武器の研究開発やらで忙しくて、行けていないのだ。

「——ともあれ、やっぱり今は魔法武器作りを頑張るしかないね。それが一段落ついたなら、いろいろ考えよう」

なんて、レオンさんは話を締めた。

そんな時、突如大きな怒鳴り声が聞こえてきた。

「だから、ここはこうじゃないって言ってるんだろ！」

「うっせーなあ！ 今直してんだろーがよ！」

庭の方を見てみるとキールとグレゴワルが作りかけの洗濯機を前に言い合っている。

孤児の兄妹のキールとアリス、そして元冒険者のティルナさんは、アメミヤ工房の最初期に雇った従業員なんだよね。

グレゴワルはつい最近、とある事情があつて雇い始めたんだけど……。

私とレオンさんは、庭の方へ向かう。

「ここ！ ここのボタンの部分の作りがめっちゃ雑っ！ これじゃあ何回か押したら壊れちゃうだろ！」

そんなキールの発言を、グレゴワルは笑い飛ばす。

「はっ！ なんもんはなあ！ 壊れた時にそいつらのせいにしたらいんだよ！」

「そんな販売者ファーストな言い分が通るわけじゃないでしょうが」

あまりにも聞き捨てならない発言をしたので、私はそう口にしつつグレゴワルの脇腹へ魔力増し増しゆるめパンチをお見舞いした。

「いでっ！」

グレゴワルは殴られたところを押さえて、しゃがみ込んだ。

「まあたバカやつてるわ。あいつに魔道具の製造なんて細やかな作業ができるわけないと思っただけどね」

「あ、あはは……でも、洗濯機はうちの看板商品だから、作れるようになってもらわないと」

そんなことを言いながら、ミシユリーヌとアリスが、洗濯籠を持って歩いてきた。

リーデルさんの一件において、私たちに協力してくれたリペリオンの幹部二人——グレゴワルとミシユリーヌの身柄は王家が預かることになった。

でも勝手なことに、王様は他の貴族家の意見とかガン無視で私にその対処を押し付けてきたんだよね……。

『お前らが見つけてきたやつらなんだからお前らで管理しやがれ』なんて、野良犬を拾ってきたような感覚で言われても、困るんだけど……。

でもまあ、人手が足りないのは事実だし、二人とも悪い人じゃないっていうのはわかっている。

だから、こうして働かせているってわけ。

なんとなくレオンさんがキールとグレゴワルの面倒を見て、私はミシュリーヌとアリスと一緒に洗濯物を干す流れになった。

それにしても……。

ミシュリーヌをまじまじと見てみると、ふと目が合った。

「……何よ」

「ううん。エプロン姿があんまり似合わないなあって思ってた」

「失礼ね！　ほんとそういうところ、キャロルそっくりよ！」

ミシュリーヌはそう怒ったように言いながら、バスタオルをパツッと叩いて敷を伸ばす。

前まで彼女とはパチパチに戦っていたけど、なんだかすつかり打ち解けちゃったなあ、なんて。

それから少しして、ちやうど洗濯物を全て干し終えたタイミンクで、ティルナさんが研究所の方から歩いてきた。

「みんなあ、ハーブティーを淹れたから休憩しない？　今日のは自信作なんだあ」

私たちは顔を見合わせて頷き合うと、研究所の中に入る。

研究所内の休憩室にやってきた。

机の上にはティルナさんお手製ハーブを使ったハーブティーに、アリス自慢の手作りクッキーが並んでいる。

早速、いただくことに。

「ミシュさん、どうでしょうか」

「とても美味しいわ。このハーブ、すごくいい香りがするし」

ミシュリーヌの感想を聞いて、ティルナさんはパツと表情を明るくする。

ティルナさんはミシュリーヌが来るまでずっと、アメミヤ工房の最年長だった。

その反動もあってか、ティルナさんは年上のミシュリーヌのことをお姉さんのように慕っているんだよね。

「そういえば、サキちゃんとレオンくんが来る前に来客があったよ」

「来客？　誰ですか？」

私が聞き返すと、ティルナさんは衝撃の答えを返してくる。

「レオンくんのお母さん」

「えー!？」

私は思わずそう叫ぶのだった。

五日後。

今日私は、レオンさんのお母さん……クロード家当主、クリステイ・クロード・ライレン様にお呼ばれして、クロード家のお屋敷に行くことになっている。

あのあと、お家に招待したいって旨の手紙が届いたんだ。

「お姉さま、素敵ですわあ!」

「そ、そうかな……? 大丈夫かな? 変なところない?」

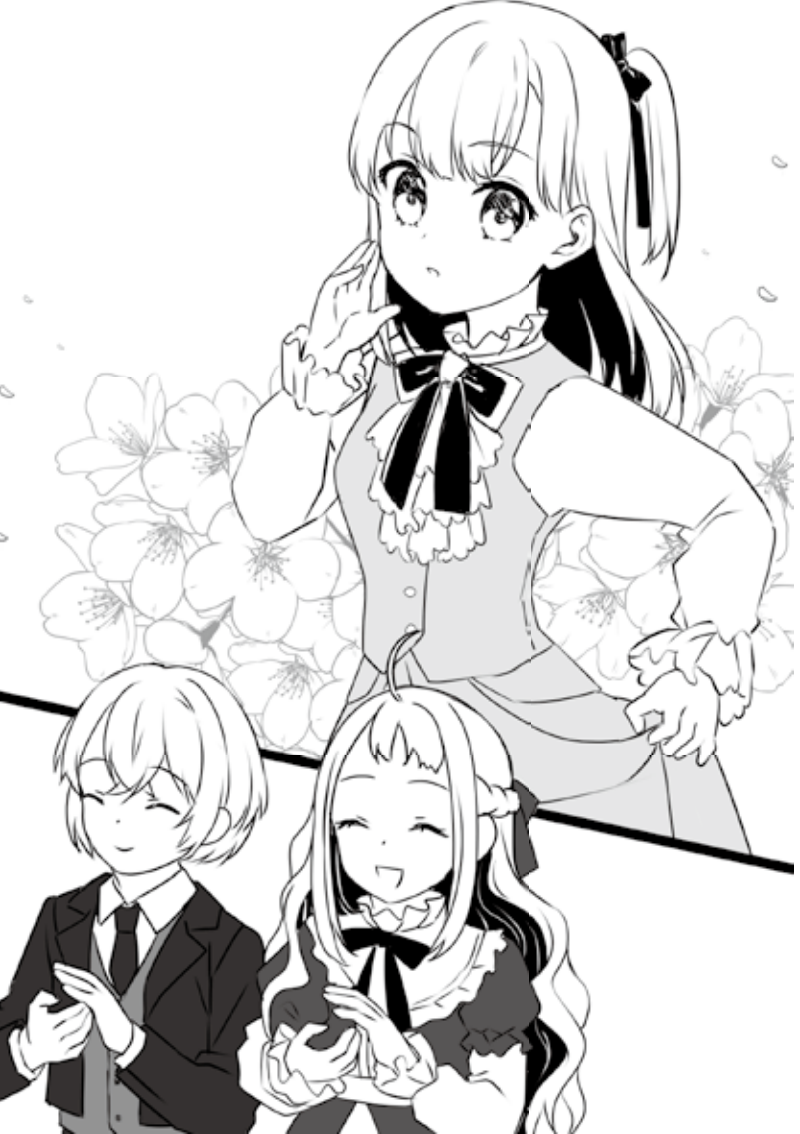
「バッチリだよ。寝癖もないし、服に皺もない」

さつきから不安な私を、アネットとフランが笑顔で褒めてくれている。

初めての学園代表戦からレオンさんとは付き合があるわけだけど、お家に行ったことは今までなかった。

うう、クリステイ様に変な子だつて思われないかな……。

「サキ様、レオン様がお迎えに来られました!」



側付きメイドのクレールさんの言葉に、私の心臓がドキンと跳ねた。  
入社面接を受ける前みたいな気分だ……。

それでもどうにか心を落ち着かせて外に出る。  
すると、馬車の前でレオンさんが待っていた。

「やあサキ。ご機嫌いかがかな？」

「胃がキリキリします……」

「ははっ、だろうね。とはいえ、何も取って食おうってわけじゃないんだ。気楽にしていよ」

そう言いつつ差し出されたレオンさんの手を取り、私は馬車へ乗り込む。

クロード家は平民区を治める公爵家なので、お屋敷も貴族区の中でも平民区に近い位置にある。

そこに向かって、馬車はゴトゴト走っていく。

「レオンさんはクリスティ様になんの御用があつて私を呼んだのか、聞いていますか？」  
私の質問に、レオンさんは首を軽く横に振る。

「いや、軽く聞いてはみたんだけどね……なぜか教えてもらえなかったんだ」

な、何それ……ただでさえ怖いのに、さらに怖くなる情報なんですけど!?

「そ、そんな怖がらなくても大丈夫だってば」

私がビビっているのを見て、レオンさんは私の肩をぼんぼんと叩く。

でも、それだけで『じゃあ、大丈夫だよね!』なんて前向きになれるほど、私はポジティブじゃない。

うう……何かご褒美でもないと、頑張れない……。

「気苦労をかけて申し訳ないね。母様との話が終わったら僕の部屋でのんびりしようか」  
レオンさんの……部屋っ!?

これは、好きな人のお部屋へのお呼ばれイベント!

確かにレオンさんの部屋がどんな感じかは、すごく気になる!

やつぱり剣がいつぱい置いてあるのかな? それとも魔石工学の本がいつぱい並んでる  
とか?

ああ、でも案外整理整頓が疎かだつていうのもギャップがあつていいかも!?

もしそうなら片づけてあげよっかな。

で、子供の頃の写真とか見つけちゃつて……!

「サキ?」

「はっ! な、なんでもないです!」

まずいまずい……変な妄想モードに入つてた。

そもそも写真なんてあるわけじゃない! この世界で最初にカメラを作ったのは私

なわけです、それだつて結構最近の出来事なんだから。

私が慌てて取り繕うと、レオンさんはふんわりと微笑む。

「よくわからないけど、元気が出たなら何よりだよ」

「はい！ ご褒美です！」

「ご褒美？」

「い、いえ！ 何でもないです！」

そんな話をしているうちに、馬車はクロード家のお屋敷へと到着していた。

「おかえりなさいませ、レオン坊っちゃん。そして、ようこそおいでくださいました、サキ様」

馬車を降りたところで、タキシード姿の初老の男性が深々と頭を下げ、挨拶してくる。

私も慌てて頭を下げる。

「本日はお、お招きいただきありがとうございます……」

かつてより人見知りなマシになったとはいえ、好きな人の家となれば話は変わる。

おずおずとお辞儀を返してしまつたわけだけど……初老の男性は気にした様子すらない。

「じいや、出迎えご苦労」

「とんでもございません。さあ、奥様がお待ちです」

レオンさんの言葉に初老の男性——じいやさんはそう返してお屋敷の扉を開ける。

そして私たちと一緒に中に入ると、扉を静かに閉めてくれた。

じいやさんの案内でクロード家のお屋敷の中を歩いていく。

廊下にはアルベルト家のお屋敷で見たことがないような鎧や剣が飾つてあつて、いかにも剣術を得意とする一族のお屋敷って感じだ。

かっこいいけど……夜にお手洗いにいく時とか怖いかも……。

廊下をしばらく進むと、中庭に出る。

そこには、テーブルが一つと椅子が三つ置かれていた。

そのうちの一つに溢れんばかりの気品を漂わせながら、ティーカップを持つクリステイ様が座っている。

その姿を見て、緊張が吹き飛んだ。

だつて、あまりにも綺麗で絵になるんだもの。

シュッとまっすぐ伸びた背筋に、翩やかなカップの持ち方——クリステイ様の佇まいからは、貴族家としての誇りのようなものすら感じる。

クリステイ様は私たちに気付くと立ち上がり、こちらに歩いてきた。

「急にお誘ひして、すみません。ようこそ、クロード家へ」

「はっ。い、いえ！ こちらこそお招きいただきありがとうございます」

私は、慌てて頭を下げる。

いけないいけない、クリステイ様に見惚れて呆けている場合じゃない。

「頭を上げてください。こちらがお招きしたのですから、そんな恐縮しないでください」  
「は、はい」

私が頭を上げると、クリステイ様はレオンさんの方を向いた。

「それじゃあレオン。私はサキさんと二人で話をしたいから、どこかで時間を潰していな  
さい」

「え?」

「えっ!?!」

レオンさん、次いで私の声。

声のトーンが明らかに違っってしまうくらい、私は驚いてしまった。

話があるとは聞いていたけど、まさか二人きりとは思っていなかったのだ。

それからクリステイ様とレオンさんは視線を交わして――

「……わかったよ」

あっさりわからないでよ、レオンさん!

私は内心そう思いながら、紐るようにレオンさんに目を向ける。

でも、レオンさんはちょっと眉をひそめながら『ごめん』って感じの目をして、庭を出  
ていってしまった。

そして残される、私とクリステイ様。

「とりあえず座りましょうか」

「はい……」

とりあえず二人で席に着く。

じいやさんが紅茶を淹れて、カップを私の前に置いてくれた。

「改めて、急に呼び出したりしてごめんなさい。気を遣わせてしまいましたよね」

「はい、いえ! そんなことないです!」

そんな風になおもカチンコチンな私を見て「ふふっ」と笑みを零してから、クリステイ  
様は言う。

「今日お招きしたのは、サキさんに頼みたいことがあったからです」

た、頼みたいこと……?」

いったいなんだろう。

クロード家は、四公爵家の中で一番の戦闘技術を誇る家。

国家規模の軍事的な依頼とかも、まず最初に声が掛かるわけで……。

あ、もしかして魔法武器について聞きたいことがある、とか?

いや、でもシンブルにレオンさんの話って可能性もあるよね。

……まさか、貴族の義務よりアメリヤ工房を優先して、自由に生きているレオンさんを

どうにかしたいとか!? そ、それは困る!

「頼みたいことと言うのは……」

私はクリステイ様の言葉を遮るようにして、口を開く。

「レ、レオンさんは、もう私たちにとってはいてくれなきゃ困る存在なんです!」

「……え?」

「で、ですから! レオンさんの貴族としての時間は確保しますので、何卒! 何卒レオンさんをアメミヤ工房から連れ戻さないでください!」

私は勢いよく頭を下げた。

すると、戸惑ったような声が聞こえてくる。

「頭を上げてください。何か思い違いをしているようですが、私はレオンのことを家に縛り付けるようなお願いをしようとしているではありません」

「え? そうなんですか?」

恐る恐る頭を上げると、クリステイ様が苦笑いを浮かべていた。

も、もしかして……私、早とちりでやらかした!?

「すすす、すみません! 私また変なことを!」

私は再び頭をビュンツと下げ、ゆつくりと上げる。

すると、クリステイ様は口元を押さえてクスクスと笑い出す。

「サキさんは思ったよりも、賑やかな人なのですね」

「す、すみません……」

クリステイ様はひとしきり笑い終えてから紅茶を飲んで、口を開いた。

「今日お呼びしたのは他でもありません。普段のレオンのことをお聞きしたかったんです」

「普段のレオンさん?」

「はい。その……お恥ずかしい話なのですが、私は母親としてあの子たちのことをちゃんと見ていられていなくて……だから、身近な友人に我が子の様子を聞ければなど」

え、えっと……つまり、貴族家としてってわけじゃなく、一人の母親として子供の様子を知りたかったってことでいいんだよね?

凜としたクリステイ様が、そんなアットホームな悩みを抱いているだなんて……。

いやいや、悩みは人それぞれ。そうとなれば、私のやるべきことは一つ!

私は胸をドンと叩いて言う。

「そういうことなら、お任せください! いくらでもお話しします!」

「ありがとうございます」

私は意気揚々と、語り出す。

「まず、レオンさんはいいつも頼りになるんです! たまに一人で抱えすぎちゃうところも

あるけど、そこがみんなのためだってわかるし、そういうところもかつこいいし……あと……それから……」

それから私は、レオンさんとどこへ行ってどんなことをしたとか、その時にどれだけ素敵だったとか、いろいろと喋った。

だってお母さんは、子供が活躍していたら嬉しいはずだもんね！

そうして話が一段落したタイミングで、ふとクリステイ様が聞いてくる。

「……サキさん、レオンとの時間は楽しいですか？」

「え？ はい！ とても！」

私の返事を聞いてクリステイ様は紅茶を一口飲み、カップを机に置いた。

そして、先ほどまでとは一変して、真剣な眼差しを私に向ける。

「サキさん、ここからは少しだけ真面目な話をさせてもらいます」

「は、はい……」

クリステイ様が口を開こうとした瞬間——塀の方から鋭い殺気を感じた。

私はすぐに愛刀・白風を取り出して、殺気がした方へと走りながら構える。

「クロード家主、クリステイ！ お覚悟！」

殺気の主はそう口にしたがら塀を飛び越え、剣を振りかぶる。

黒子のように、顔の半分を黒い布で覆っている。きつと、暗殺者だ。

そして声から推測するに、男だろう。

クリステイ様を守らないと！

「させない！」

私は暗殺者の男の剣を受け止めた。

それからは、激しい剣の打ち合いになる。

くっ……こいつ、強い！

レオンさんとの訓練で私も少しは剣の腕が上がっていると思っていたけど、徐々に押さえられているのがわかる。

私はネルと協力して生み出した剣術——ネル流剣術の技を繰り返す。

「ネル流剣術スキル・【刺々牙き】！」

しかし、暗殺者の男は焦った様子もなく私の技を受ける。

「レインバント流剣術・【天蓋】」

そして、反撃してくる。

「トウリアフ流剣術・攻の構え・【炎獅子】！」

「なっ!?」

これは学園代表戦で戦った、ロイさんの流派の技!? さっきとは違う流派の技を使うだなんて！

私はそれでもどうにか攻撃を凌ぎ、後ろに飛びのいて距離を空ける。様々な流派を扱って、状況に応じて使い分けている……だけじゃない。一つ一つの技が、どれも食らえば致命傷になりかねないくらいの威力だ。

「ローデンベルク流剣術・【早駆け】」

せっかく空けた距離を特殊な歩法で一気に詰めてきたかと思えば、目の前から消えた。いや、後ろだ！ こうなったら一か八か！

私は白風を鞆に収めながら身を捻る。

男は上段に構えていた。

「トウリアフ流剣術・【天駆】！」

「ネル流剣術スキル・【居合・一風】！」

力強く振り下ろされた剣に向かって、私はネル流の中でも最速の技を放った。両者の剣が宙を舞う。

男は驚いたようで、一瞬動きが止まる。

この隙を逃さない！

「ネル流魔術・【陽光一突き】！」

魔術とはその名の通り、魔法と武術を融合した技だ。

私の右手に炎が灯り、男のお腹へ向かって加速していく。

その時、男が短刀を振るっているのに気付く。

避けられない……このままじゃ相打ち!? いや、刺し違えてでもクリステイ様を守るんだ！

「そこまでです！」

クリステイ様の声が響いた。

男は攻撃をやめて、私の拳を間髪で避ける。

私の攻撃によって風が巻き起こり、顔を隠していた布が少し捲かれた。

「あ……」

男の正体が、わかった。

「……これはどういうことですか。レガール様」

ちらっとしか見えなかったけど、あの顔は間違いなくレオンさんのお兄さん、レガール様だ。

なんだか騙されたような気分。

私はついつい、ムツとした顔をレガール様に向けた。

レガール様は短刀を懐に仕舞いつつ、軽く頭を下げる。

「すまないな、サキ嬢。詳しい話は母から聞いてほしい」

クリステイ様の方を見る。すると彼女は、先ほどとは違って鋭い目で私のことを見つめ

ていた。

まるで、何かを見定めようとしているかのような、そんな目だった。

「レガール、ありがとう」

そう言って、クリステイ様はさっきまで私が座っていた椅子を手で示す。

レガール様はふっ飛んだ彼の剣と白風を拾う。そして自分の剣を鞘に収め、白風を私に渡してから「それではまた」と口にして、庭から出ていった。

私は白風を鞘に収めて収納空間にしまつてから椅子に座り、クリステイ様に向き合う。

「実は現在、クロード家と繋がりのある貴族たちがレガールとレオンのどちらが次期当主にふさわしいかで対立し、派閥が生まれてしまつて居るのです」

「え……」

私は唐突な話に、驚く。

貴族の後継問題は、その家だけでなくその家と関わりのある貴族をも巻き込むという話は、聞いたことがある。

しかし、いざ自分の身近な人物がその渦中にいると思うとなんというか……テレビで見ているかのような現実感のなさだ。

「レガールを評価する派閥は、レガールがいかにレオンよりも体術、剣術に優れているかということを主張しています。親の私から見てもあの子の身のこなしは天賦のものだと思

います。さらに、あの子はカルバート家のメイリーとは幼い頃から親しくしていますし、次の代に繋ぐという意味でも有望だと思われているようですね」

え、ええ!? それって、レガール様とメイリー様がいい感じってこと……だよね!?

た、確かにお似合いの二人ではあるけど。

そんな風に驚く私に構うことなく、クリステイ様は話を続ける。

「反対にレオンの評価は、クロード家始まって以来の魔術の天才といったところかしら。でも、クロード家において剣術に優れていることは何においても重要。そういった事情で、レガールの方が周囲の評価は高かったのです」

クロード家はこのグリーリア王国が作られた時に一技必殺と謳われた『抜剣術』を評価され、四公爵に選ばれた一族。当然、体術や剣術に秀でた人が歴代当主となっているだろうことは想像に難くない。

私としてはレオンさんの夢……冒険者になつていろいろな場所を旅したいつていう夢を知っているから、そのままレガール様になつちゃえ〜って思っちゃう。

でもクリステイ様としてはそんな簡単に決断できない話ではあるだろう。

「でも、それはちょっと前までの話。実は今、状況が変わりつつあります。あの子が生み出した、ある技によつて。確か『抜剣術魔纏【断閃】』と呼んでいたかしら」

私の魔剣術と、前に戦ったモーブという男が使っていた魔法を元にレオンさんが編み出

した技だったかな。

レオンさんの愛剣であるノーチエと私の白風は、炎の精霊が灯した特別な炎である聖炎によって生み出された、魔力を帯びる鉄——魔含鉄でできている。

そして、魔含鉄によって造られた剣は、他の剣と違って魔力を纏わせることができるのだ。

断閃は、剣の表面に纏った魔力を刃先に形成して高速で放つ、強力な技なんだけど……。「その技によって、どう状況が変わったんですか？」

「……抜剣術は元々、対人に特化した剣術です。他の流派の剣を置き去りにし、一技必殺とまで言われるほどに、それは強力なものでした。ですが、大量の魔物に対して特別強いというわけではないです。いかんせん、一度の技で斬れるのは一体だけですから」

「それが跡目争いの話にどう……あつー」

クリステイ様は頷く。

今、リベリオンの召還魔物の軍団による襲撃に対してどう対応するべきか貴族たちが議論しているって、パパが言ってた。

そういった意味で剣術と魔術、どちらも使いこなすレオンさんは、かなり優秀だと言える。

「レオンを支持する者たちが『新たなクロードとしての道を作るのはレオンである』とよ

り強く主張するようになったんです」

なるほど……それは自然な流れだよな。

でも、となると新しい疑問が生じる。

「レオンさんの評価が上がったことは理解しました。でも、それとさつきレガール様が襲ってきたこととはどういった関係があるのでしょうか？」

私が聞くと、クリステイ様は咳払いを一つしてから口を開く。

「……レガールにはメイリーがいますが、レオンには今まで懇意にしている女性がいたこととはない。しかし最近、あなたにずいぶんと熱を入れているとの情報を得まして。貴族家には血を重んじる人間が多い。あのレオンが興味を持つ女性ならば、いざれクロードに……ということも考えられますでしょう？ あなたがどれだけ強いのかを知りたかったのです。早計なのはわかっているのですが……」

つ、つまり……これは息子の未来の嫁候補を見定めるための試練ということですね!?

どうしよう、なんだか変な汗がいちゃいそう。

するとクリステイ様は居住まいを正す。

「クロードに……半端な者はいらぬのです」

背筋が凍るようなプレッシャーを感じた。

でも、私に圧をかけようとしているってわけじゃなさそう。

たぶんこれは……名家の妃としての覚悟なのだろう。  
きつとクリステイ様自身もそういう覚悟で、ここに身を置いているんだ。

「えつと……」

私はどう言葉を紡ぐべきか思案していると、クリステイ様は言う。

「とはいえ……予想外でした」

「えっ!？」

「あ、いい意味で、ですよ」

そう言っつてクリステイ様はふつと笑う。

一瞬驚いたけど、いい意味ならよかった。

これで『あなたはクロードにふさわしくない』だなんて言われたらショックで気絶しちゃうもん!

クリステイ様は、再度真剣な表情を浮かべ、頭を下げてきた。

「試すようなことをして、すみませんでした。立场上、正しく当主を選ぶ必要があります、強引に事を運んでしまったこと、謝罪いたします。魔術師としての実力はこれまでの功績が裏付けてくれますが、近接戦闘の技量もどうしても見ておきたかったです。そして、その上で確信しました」

「確信?」

クリステイ様は私の頭を撫でながら、優しい声で言う。

「レオンの近くにいる子が、あなたでよかった」

「え、えつと……」

「最後、剣を弾き飛ばしたあとに相打ちになってでも私を守ろうとしましたね」

「そんなことわかるんですか!？」

「わかりますよ。拳を振るう瞬間に、一瞬こちらに視線を遣ったでしょう?」

「剣の達人……恐るべし……」。

「太刀筋や所作を見ればわかります。あなたも、自分ではない誰かを守る優しい人だよね。これからも、レオンと仲良くしてあげてください」

「……はい!」

なんか大変だったけど、クリステイ様にいい印象を持ってもらえたならよかったあ!

「お時間をとらせてしまいすみませんでした。そのあなた」

「はい」

クリステイ様に呼ばれた、近くで控えていたメイドさんが、こちらに近づいてくる。

「サキさんを、レオンの部屋に案内してあげて」

「かしこまりました」

「サキさん、またお話ししましょう。私は公務があるので、これから王城へ向かわなけれ

ばならないのです。ゆっくりしてってください。では」  
 「ありがとうございます！」  
 クリステイ様が庭を出ていくのを見送ってから、メイドさんに案内してもらって、私は  
 いいよご褒美……じゃなくて、レオンさんのお部屋へと向かった。

「こちらが、レオン様のお部屋でございます」

しばらく歩いたところでメイドさんは立ち止まり、そう言った。

目の前の扉はポロポロで、何度も修復した跡がある。

どういうこと……？　もしかして前世の私みたいに手ひどく寝かけられて、とかじゃない  
 よね？

そんなことを考えている間に、メイドさんが扉をノックしてしまった。

「レオン様、サキ様をお連れいたしました」

「ああ、入ってきてもいいよ」

部屋の中からレオンさんの声が聞こえてきた。

メイドさんが扉を開けてくれたので、私は中に入る。

「それでは私はこれで」

「あ、はい。ありがとうございます」

メイドさんは頭を下げ、静かに扉を閉めた。

そうして私は、思わず部屋を見回してしまふ。

部屋は綺麗に整頓されていた。家具は壁沿いに勉強机や棚に、ベッドがあつて……あと  
 は、部屋の真ん中に丸いテーブルと椅子がいくつか置かれているくらい。

飾り気はないけど清潔で、レオンさんっぽい部屋だ。

レオンさんは丸テーブルのところの椅子に座っていた。

そしてその隣にはレガール様がいて、ベッドにはメイリー様がごろんとしている。

三人は幼馴染で一緒に過ごすことが多いって知ってはいたけど、メイリー様とレガール  
 様がいい感じだつて聞いたばかりだからなんだかドキドキしちゃう！

「やあ、サキ。大変だったね」

「まったくです。もしかして、ほんととはレオンさんはこうなるって聞いてました？」

レオンさんがそんな風に話しながら自分の隣の空いている椅子に座るよう私に促して  
 きたので、私はそこに座る。

「いや、知らなかったよ。サキを待つために部屋に行くと、兄上がいなくて姉さんがくつ  
 ろいでたから、なんとなく察したけど」

すると、レガール様がテーブルの上のポットから近くにあったカップに紅茶を注ぎ、私  
 に出してくれつつ口を開く。

「サキ嬢、先ほどは失礼したね」

それを聞いて、メイリー様はがばっと起き上がって、会話に参加してくる。

「いや、ほんとよね。レオンと一緒に遠くから見ただけど、ちよつとは手加減したら？ って思ったわよ」

「下手に手加減すると母上にバレてしまうし、それに英雄殿に手加減など不要かと思つてね」

「もお……英雄って呼ばないでくださいよ」

私が頬を膨らませると、レガル様はおかしそうに笑う。

「ははっ、すまない。だが、高等科の中でサキ嬢の武勇伝は、話によくあがるのでね」

「そうねえ、私の学年でも結構話にあがってるわ」

「それじゃあこれからもっと有名になるね」

そんなレオンさんの言葉に、私は首を傾げる。

「どうしてですか？」

「模擬戦とはいええ、兄さんと剣術で張り合つたんだ。そんなことができる人は魔法学園の中でも一握りもない」

「ええ!？」

「ああ、サキ嬢との打ち合いは実に心躍つた」

「うう……忘れてください。あの時は本当にクリステイ様を守らなきゃって思つて……」

「守らなきゃって思つて、すぐに動けることがすてきなことよ。普通の令嬢だったら、固まつちゃうもの」

ん？ それじゃあ……。

「メイリー様も——」

「お姉ちゃん！」

ああ、そういえばそうだった……前にメイリー様を間違つて『お姉ちゃん』って呼んだことをきつかけに、そう呼ぶことになってるんだ。

とはいえ『姉』呼びしているのって私とレオンさんくらいらしいから、ちよつと恥ずかしいんだけど……この場にはレオンさんもいるし、いっか。

「お、お姉ちゃんもやったの?」

「ん？ ああ、やったわよ。私の時はレオンが相手だったけどね」

笑顔で言うメイリーさんに対して、レオンさんはその時のことを思い出して苦笑いした。

「姉さんは容赦ないもんだから、大変だったよ」

「ああ、こいつは加減を知らないからな。あとで庭を修復するのが大変だった」

メイリー様、何したの!?

まあ、それはこの際置いといて……。

「あ、あのレオンさん。この扉って……」

「ん？ ああ、これ？ 昔、僕はこの部屋で剣の練習をしていたね。何度も斬っちゃうものだからついには自分で直すように言われちゃって」

「へ？ じゃあ虐待とかそういうわけじゃ……」

素っ頓狂な声で聞き返す私に、レオンさんは微笑む。

「虐待？ ああ、ないない。母様に虐待なんてされたら、今頃僕も兄さんも生きてな  
らさ」

「はははっ！ それはそうだな！」

「そ、そうなんだ。よかったあ……」

レオンさんとレガール様が笑い合っている姿を見て、私は胸を撫で下ろした。

そうだよな。ついつい前世の経験に引つ張られて悪く考えてしまっていたけど、あんな息子思いなお母様がそんなことするわけないもんね。

「……さ、レガール。二人の邪魔をしてはいけないわ」

「ん？ ああ、そうだな」

「それじゃあサキちゃん、レオン。またね」

レガール様とメイリー様は立ち上がり、私とレオンさんに手を振って部屋を出ていった。部屋の外から「それじゃあ、約束通り私の買い物に付き合ってもらうからね」という明

るい声が聞こえてくる。

どうやらこのあと、メイリー様とレガール様はショッピングのようだ。

そんなこんなで、レオンさんの部屋で、二人きり。ドキドキしてしまう。

レオンさんも少し気まずそうに視線を斜め上に向けながら、口を開く。

「なんかごめんよ、サキ」

「い、いえ！ 大丈夫です」

それから少し間が空いて、レオンさんが言う。

「兄さんと戦って、どうだった？」

「強かったです。対応力がネル流剣術の真髄なのに、他流派の技を組み合わされたこと  
で互角……いや、上回られちゃいました」

「ははっ、確かにね。僕もネル流を学んではそこそこ戦えている気がするけど、それでもまだ兄さんの底は見えない。やっぱり兄さんの剣術や体術のセンスはすば抜けてるよ。でも、サキはいい線いってたじゃないか。剣を弾き飛ばしたんだし」

「でも、他の武器を持つてる可能性を考慮できてませんでした。やっぱりまだまだです」

そう、刺し違える覚悟で——なんて思っていたけど、結局レガールさんに最後の攻撃を避けられている。あれが真剣勝負だったなら、負けていたことだろう。

私が両手を握ってグツと気合を入れると、その様子を見てレオンさんが私の頭を撫でた。

## 立ち読みサンプル はここまで